

2023（令和5）年度 福岡女子大学 外国人留学生選抜

〔 一般選抜・二次募集試験問題 〕

国際教養学科

小論文

【 60 分 】

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は4ページから5ページにあります。問題は全部で**1題**です。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 4 試験開始と同時に解答用紙の**受験番号欄に受験番号を記入**してください。
- 5 試験終了後、**問題冊子は持ち帰って**ください。

問題 次の文章を読んで、後の問全てに解答しなさい。

五月の第二日曜日は、母の日。日ごろ苦勞をかけているお母さんに感謝して、カーネーションなどを贈る日となっている。

この「お母さん」という言葉は、いまでは日本国中どこへ行っても押しも押されぬ標準語になっているが、明治の末のころまでは、東京では士族階級の人たちはオカカサマと言い、町人階級の人たちはオッカサンと言うのが普通だった。文部省（現・文部科学省）ではそんな身分・階級によって違った言葉をお母さんに使わせるのは良くないと考えて、明治三七年に初めて小学校の国語の教科書で、お母さんという言葉を使ってみたのだそうだ。しかし私の母などもそうだったと言うが、誰もがお母さんという呼び名は照れくさくて、(1) 自分の母親に向かってそう呼ぶ人は誰もいなかったという。そしてその教科書は特別に「お母さん読本」というあだ名で呼ばれたそうである。

なお、この「お母さん」は、「おかたさま」から出た言葉。もともと上流の家庭では「奥方」という意味の「北の方」という言葉を省略して、それに「お」をつけて「おかたさま」と呼んでいたが、江戸時代には「お内儀さま」ぐらいの意味にランクが下がっていた。なお、京都・大阪では江戸時代の末ごろ、自分の母親を「お母さま」と呼んでいる家庭も結構あったようだ。

さて、そんな文部省の肝煎りでこのお母さんという呼び名は始まったのだが、現在誰もがお母さんと普通に呼んでいるのを見ると、(2) やはり教育の力というものすごいものだと思う。

(金田一春彦『ホンモノの日本語を話していますか?』角川書店、2001年より)

肝煎り …… 配慮して世話をすること。

問1 下線部(1)「自分の母親に向かってそう呼ぶ人は誰もいなかった」について、なぜ当時多くの人たちがそうになっていたのか、文章の内容にしたがって説明しなさい。

問2 下線部(2)「やはり教育の力というものはすごいものだと思う」について、ここでは「教育」が何に対してどのような大きな変化をもたらしたのか、文章の内容にしたがって説明しなさい。

問3 家族の呼び方や家族に対する言葉遣いに関して、具体的な日本語の例を取り上げながら、日本人の人間関係の考え方やその特徴について、あなたの考えることを論述しなさい。